

いじめを受けた生徒への養護教諭を中心とする初期対応事例

キーワード： いじめとは何か

相互（会議型）コンサルテーション

傾聴・応答・質問技法

この事例解説では、コンサルテーションを中心にした養護教諭の初期対応に焦点をあててまとめました。

実践の概要とポイント

コンサルテーションを中心としたかわり

Kは、5月の連休明け頃から、級友数人から「デブ」「オカマ」などと言われ出した。さらには「仲間だろう」「後で払うから」とジュースを買わせられたり、トイレで用を足しているときにいたずらをされたりもしていた。

学級担任は、こうした事実は知らなかった。ただ、最近、Kの遅刻が目立ち、級友もそれを批判するようになり、担任も何度かKに注意をしていた。

5月末、Kは、授業中に腹痛や吐き気を訴えて、3日間、保健室を訪れた。不審に思った養護教諭が、カウンセリングをしたところ、いじめの事実を話した。遅刻も、朝の使い走りをするためであった。また、Kは連休前から学級で孤立しはじめ、いじめをしている数人しかKにかかわる者がいないと訴えた。相手にされないよりはいいと感じ、がまんしていたのである。

このことは、病気がちな母親に心配をかけたくないで、言っていない。後のことも怖いので、誰にも言わないで欲しいとのことであった。

養護教諭は、いじめは絶対に許さないこと、いじめからKを守るためには事実を先生方に知ってもらわなければならないこと、学級やいじめている数人を指導する場合、Kと事前によく話し合うことで合意した。

養護教諭は、教育相談担当者に相談し、翌日の5校時、学級担任、学年長、副担任、クラブ顧問の時間割を調整してもらい、6人で作戦会議を持つことにした。

作戦会議では、養護教諭が司会をした。「作戦会議シート」に沿って話し合いを焦点化し、時間配分も考えながら進めた。いじめの状況報告は養護教諭が行い、小学校や家庭、学級での様

欠席だけでなく、遅刻や早退も不適応状態を示すサイン。遅刻の背景に、何らかの不適応状況があるかもしれないという慎重さをもって、丁寧に聴く。

自分の苦しみは、簡単には他人に言えないもの。保健室に訪れた3日間の対応で、養護教諭はKの信頼感を得て、相談されたと思われる。

傾聴技法や応答技法、質問技法を使って、Kが味わったつらさを具体的に理解しようとするのが大切。そのため、いじめもつらいが、相手にされないことがなおつらいという心情まで吐露している。

保護者への連絡や相談は不可欠にしても、Kの気持ちへの配慮や保護者に知らせる緊急性を判断して決める。

いじめは絶対許さないこと、総力を挙げて守ること、Kの不利になるような対応はしないことは伝えたい。Kとよく話しあいながら進めていくことで合意することは、Kが主体的に問題の解決にかかわることの意味合いもある。

こうした養護教諭の「軽快なフットワーク」が迅速な対応を可能にし、Kの信頼感を得ることにもなる。

メンタルヘルスの問題に関する作戦会議は、養護教諭がリーダーシップを発揮していくことが重要。こうしたコーディネートがチームでの対応を機能させる。

子やKの性格・行動等の特徴及び学習状況等については、学級担任から情報提供してもらい、他のメンバーがそれを補足した。

入学後間もないこともあって、得られた情報は多くはなかったが、現時点での苦戦状況を「周囲に聞こえるように悪口を言われる、使い走りをさせられる、いたづらをされる」ことと「級友と親しくされず、孤立感を感じている」ことと理解した。

Kの自己資源や他者資源として「このようなつらい状況でも登校している強さ」「養護教諭への信頼感」「素直でまじめな性格」「学級に同じ部員で思いやりのある生徒がいること」が把握できた。

そこで、当面の指導・援助の目標を緊急性の高いことから、「いじめをこれ以上エスカレートさせない」「保健室をKの緊急避難的な場所とする」「学級の親密さを高める」ことにおいた。具体的には、「明日、担任が、Kに対し全力でいじめから守ることを伝える」「明日、養護教諭が、Kと、いじめの事実があったら小さなことでも報告にくることで合意を図る」「授業開始前や終了後、教科担任が、教室や廊下において生徒たちとコミュニケーションをとりながら観察する」「明日、担任が、小学校時代の担任に電話して、保護者に関する情報や対人関係に関する情報を得る」「保護者への連絡は、現時点では拙速にならないよう控える」「級友の活用はまずは控える」「課後緊急学年会を開き、学年の意思統一を図る」「明日から1週間実行し、次回作戦会議でその結果を検討する」こととした。

「作戦会議シート」というフォーマットの活用によって、アセスメントから具体的な対応策の決定までの道筋が得られる。

現時点での苦戦の状況を理解し、なぜそのような苦戦が生じたり、維持されているのかを考える。もしかしたら自己肯定感の低さや、学習面での挫折が背景にあるのかもしれない。こうした見立てをしていくことが必要であり、そのためにも苦戦状況の理解が重要。

登校していることを当たり前とせず、資源として見る。保健室に来ることも同様である。つい当たりに思ってしまうこと、欠点やマイナスに思えることも資源であることが多い。また、Kを直接ささえる資源として養護教諭の専門性が生かされている。

当面の指導・援助として、誰が、誰に、何をするのかを明確に決めることが大切。スモールステップで、小さくてもできることを積み重ねていく発想も大切。

今後、養護教諭は、対応策の実行をサポートしたり、実行状況を把握したりしながら、作戦会議を企画する。対応にあたっては、保健室でのカウンセリングやアセスメントが重要になると思われる。また、今後、保護者との連携を進める上で、養護教諭の役割は、一層大きくなることが予想される。

【参考文献】

- 大野精一『学校教育相談 理論化の試み』ほんの森出版 1997
大野精一「学校教育相談の実践を読み解く」『月刊学校教育相談』ほんの森出版2003 4月号～2004 3月号
石隈利紀『学校心理学』誠信書房 1999
学会連合資格「学校心理士」認定運営機構監修『講座「学校心理士 - 理論と実践」1～4』北大路書房2004
八並光俊・木村慶「組織開発による協働的生徒指導体制の構築に関する研究」『学校教育学研究12』2000
八並光俊「柔軟にかかわり続ける」生徒指導体制の構築」『月刊生徒指導29(13)』1999
佐藤一也「作戦会議を核とするチームでの指導・援助体制づくり」『月刊学校教育相談』ほんの森出版2004 11月号
佐藤一也「作戦会議を中心とする教職員の連携」『高校教育展望』小学館 1999 2月号